

第2回

行として道として

大辻 永

茨城大学教育学部准教授

はじめに

武蔵高校や成城学園で活躍した和田八重造(1870-1961)が「子供達に自然現象に対する正しい目を開かせたい」と言った中の「正しい目」とは、どのようなものだったのか。橋田邦彦(1882-1945)元東京大学教授の見方と同じではなかったのか、というのが目下の作業仮説である。橋田の思想は、『自然の観察』(昭和16年)と相まって、「日本独特の教科『理科』の原点」として最近注目が集まってきている(出版ダイジェスト 2009)。自己と向き合い、子どもの将来に働く能力を考えた赤松弥男(1919-1991)にも呼応するところがあるので、科学や教育に関する橋田の主張を今回は取り上げてみたい。

行としての科学 科学する心

科学とは、科学するとはどのようなことか。橋田は、つまるところ「観察」だという。「観察」については川崎謙高知大学教授の研究に詳しいが、「観」は「探り観る」や「直観」の意であり、「察」は「つまびらかにする」ことを指す。「観察」は真に観ることであり、観るものと観られるものとが一体化する。これを「主客未分」、「物心一如

ともいう。「ただ観る」という働きだけが、「行」としてそこにある。また、それは「心」の働き、すなわち、人間の人間としての働きでもある。

無心になって自然現象をのぞき込む子ども、患者を一目見て病気を言い当てる名医などを思い浮かべると、理解の手助けになるのか。和田が言った「自然現象に対する正しい目」とは、第一に、人間の働き(心)として、対象と一体化する「観察」(行)の中に見いだされるものだったのかもしれない。橋田は、「ものごと」を正しく把握する、掴むということが科学すること、すなわち、「科学する心」だと言う。最近聞かれる「科学する心」というキャッチフレーズは、橋田邦彦の創案による。

なお、橋田の言う「行」とは「唯従自然」、「道」(自然の動きそのもの)にしたがうことであり、その赴くところは人格変容である。

道としての教育 俱学俱進 学道一如

さて、得られた知識は、抽象的なものであっては不十分である。人生活動に織り込まれ、真実その人の活動となるような知識、具体化された知識であって、換言すれば本当の智慧でなければならない。この辺り、赤松の「能力」の捉え方に通じるものがある。

そして、持っている知識が本当の智慧として働いていれば、そこに人間の価値が生じてくる。人間の価値を決定する、人生を人生たらしめている大元は、「道」という大自然の働きである。それが人間にも働くものと自覚するところに、人間の働きとしての「道」が現れてくる。

もし本当の知識、智慧を師匠から弟子に伝えるのであれば、第一に、教える者において知識が具体化していない限り、つまり、「行」としてその人の人生活動となっていない限り、受け取る者の方において具体化されるはずはない(この辺り、耳が痛い)。授ける者は少なくとも「道」を自ら把握し、人生を人生として把握していなければならない。

橋田は自己に対して厳格であり、研究において

も、学生に範を示す態度を常に持っていたという。伝えるためには、第二に、教えるものと教えられるものが全く一つになっている必要がある。橋田はこれを「俱学俱進」と呼んで実践していた。

だとすれば、「学ぶ」ということは「道」を学ぶことであり、「道」によってのみ「学び」が成り立つ（学道一如）。人生を人生として把握すること（宗教）によってはじめて、学が本当の「学」になる。

教育の実践

「教育」は抽象的な知識を伝えるだけでは全く不十分で、「学」を授けると同時に「道」を授け、その個人を「あらしめる」。したがって、「道」を離れては成立しない。「まなび」という言葉が流行って久しいが、ここでいう「学」の意味は相当深遠である。

実践としての教育は、具体的な知識を獲得できるような素質のある者をつくり上げることと捉えられる。そのような素質があれば、日常生活において時々刻々自己の周囲において現れられるもの、自己の見るもの聞くものを知識として、具体的に自分から掴むことが出来る。授けられたものが本当に智慧として働くようにする。あらゆる社会に向かってこれから生い立つことの出来る子どもを輩出すること。これは前回の赤松にも、和田にも共通するところである。

和田の言う「自然現象に対する正しい目」が、橋田の言う「ものごとの正しい把握」と同じ意味だったとしたら、第二に、和田は「道」まで意識していたことになる。「行」として身を正し、子どもと一体となって自らも研鑽を積み（俱学俱進）、「学」を「道」と共に授ける「教育」を行う中で（学道一如）、先の「観察」をさせていたことになる。

おわりに

和田が「行」として甘藷を生徒に栽培させていたという記述も、橋田との親和性を感じさせる。

また、和田の「正しい目」は、仏教でいう「正見」を思い起こさせる。しかし、和田が本当に橋田のように考えていたのかは、まだわからない。「理科は自然科学教育であって西欧近代科学の知識体系を伝えるものだ。そのためには、自然現象を対象化して主観を排除し客観的に捉えさせ、教科書にある基礎基本を覚えさせることが先決だ」と、橋田とは対照的に考えていた可能性もまだ排除できない。

橋田については多くを解説しなければならないが、ここでは紙面の都合上思い切って省くことにした。

橋田は、「案外教育の実があがっている」と評している。それは、「働く人が人間らしくなろうとする人々であった、その結果に他ならない」としている。ここで「働く人」とは、教師だけではない。自然現象と一体になって「観察」する子どもたちも含まれていると考えるべきであろう。無意識に行っている日々の活動を、「行」や「道」として自覚するところが重要なポイントである。

【謝辞】

川崎謙高知大学教授から貴重な助言をいただいた。心から感謝申し上げたい。

【参考文献】

- 橋田邦彦『行としての科学』（昭12）、「道としての教育」（昭13）日本文化協会、『科学する心』（昭15）文部省教学局
 [[復刊] 自然の観察』農文協、『出版ダイジェスト』（2009.4.20）



茨城大学教育学部理科1年生による甘藷の挿苗